

冷戦の象徴とも言えるベルリンの壁が崩壊して今年で20年になる。その当時現場で取材にあたった特派員記者によれば、東ドイツの人たちに対して行ったインタビューの中で一番多かった声が、移動の自由を訴えるものだったという。東ドイツには西からのさまざまな情報は入ってくるが、そこへ行く自由は制限されていた。現在の旧東ドイツとは違い、当時の東ドイツは失業もなく物価も安定していたようだが、移動の制約は壁を壊す市民のエネルギー源の一つとなっていたのだろう。

このような状態は、現在のコンゴにも当てはまる。さまざまなメディアを通じて世界中の情報が入ってくる一方で、大多数の国民にとって外国へ行くことは夢物語でしかない。それどころか、昨今では国内での移動すらままならない。80年代までは、首都のブラザビルや第2の都市ポワントノワールには、市民の足として路線バスが走っていたが、今は存在しない。代わりに、通常9人乗りであるはずのワゴン車（多くはトヨタのハイエース）を改造し、15～16人乗りとなった「ミニバス」と呼ばれるものが町中を走り回っている。タクシー（乗り合いのタクシーも含む）も人々の移動手段として重要で、ミニバスと併せて交通量全体の約8割を占めている。しかし近年、仕事のない農村部から人々が都市に集まり、それに伴って都市郊外の宅地開発が加速し、ミニバスの路線や数が人口増加に追いついていない状態となっている。町の中心に行くのに、満員のミニバスを何台も見送らなければならない。

国内の移動手段には鉄道と飛行機もある。しかし飛行機に関しては、アフリカの国々で国内路線の墜落事故が相次いでいることを受け、コンゴでも機体の安全性が再点検され、基準を満たしていない数社で旅客輸送ができなくなった。（今年の9月にもカーゴ機がブラザビル近郊で墜落し乗員6名が死亡した。）その結果、旅客機の数が激減し席を確保することがより難しくなった。もっとも、飛行機で移動できる人はほんの一握りで、多くの人たちが鉄道を利用する。首都とポワントノワールを結ぶ鉄道は内戦で一時は運行不能となったが、数年前にようやく再開された。けれども、反政府ゲリラの拠点となった地域では、今でも列車が襲撃され、輸送物資が略奪され、乗客が金品を巻き上げられる事件が続発している。政府もあえて手を出さず、状況は一向に改善されていない。それでも他に交通手段がないので、常に満員状態である。それは日本の都心のラッシュアワーの状態に近い。そんな列車が500キロの道のりを丸二日もかけて移動する。途中で何回も止まり、乗客は停車の理由も知らされないままそのたびに何時間も待たされる。トイレの設備もなく、女性でも満員状態の中では、ペットボトルで用を足さなければならないという。

地方との行き来にはトラックも欠かせない。荷台に満載された物資と一緒に乗るのだが、整備不良の車両が多く頻繁に故障しストップする。止まっても、前払いの料金が返ってくことはない。故障したトラックが修理されるまでその場で待つしかない。交換部品を取り寄せるとなると、時には何日もかかることがあるらしい。また、トラックの横転による死亡事故も珍しいことではない。

日常的に人々が直面する問題は移動だけではない。インフラの整備も遅々として進んでおらず、とりわけ問題なのが毎日のように起きる断水と停電だ。何の予告もなく突然やってくる。1週間近くも水道がストップし、人々がそれぞれにバケツやタンクを持って水を求めてさまよう姿が見受けられた。インターネットカフェが普及しても停電で通信が遮断され、携帯電話を持ってバッテリーの充電先を求めてさまようのである。仕事がないことも大きな社会問題であることはいうまでもないだろう。要するに、多くの若者が将来の夢を抱くことができない社会の中で暮らしていると言える。

このような状況に置かれているのはコンゴだけに限ったことではなく、他のアフリカ諸国でも同様で、多くの人たちが現在の生活から抜け出したいと願っている。そうした状況を、松本仁一氏は著書『アフリカ・レポート』（岩波新書、2008年）の中でアフリカの「押し出し圧」と表現している。

「コートジボワールの将来は、誰がどうやってもよくなると思う。金持ちしか政治家になれず、権力を持つ者が金持ちになる。貧乏人はいつまでたっても貧乏のまま。部族差別はなくなる。コネ万能もそのままだろう。努力した者が報われるという社会ではない」（130頁）

「せっかく大学を出ても、コネがなければ就職できない。中央政府は主流のハウサ族に占められ、イボ族は冷遇される。そのためビアフラでは、ナイジェリア国内の生活に見切りをつけて海外に出ようとする若者が多い」（146頁）

このような声はコンゴでもよく聞かれる。若者が将来に対して悲観的で、彼らは明るい未来を抱くことができない状態にあるようだ。多くの人々がコンゴから出て行きたいとさえ思っている。さらにここ数年は、社会の「押し出し圧」はますます高まってきているように感じられる。こうした状況の中で、宗教が溜まった圧力を軽減する一つの手段として期待されても仕方がないのかもしれない。また、それがコンゴの人たちにとって「外来宗教」であるならなおさらで、国外への扉が開かれるとさえ思われる。外に出たいという思いと、「お与えいただいたものをいかに喜ぶか」という「たんのう」の精神、つまり陽気ぐらしの境地とどのように折り合いをつければいいのか。コンゴ伝道には難しい問題が突きつけられている。

コンゴには東西を隔てていたベルリンのような壁はない。しかし、目には見えないが、富む者と富まざる者を隔てる「南北の壁」が地球規模で存在し、昨今その壁はますます高くなるようにしている。それと呼応するように、その壁の中でしか生きられない人たちの「押し出し圧」も高まっている。それを少しでも和らげ、「あの世」ではなく「この世」における陽気ぐらし世界の建設を目指す教えをいかに理解してもらおうのか。そのためには、コンゴ社会における宗教の役割を再考する必要があるように思われる。そして少なくとも、おぢばからの布教師は、冷戦時代のドイツで西の人なら比較的簡単に東を訪問できたように、移動する自由があることを認識し、東側が作ったベルリンの壁がそうであったように、人を外に出さないように作られた壁の外側にいるという事実も忘れてはいけないと思う。